

通常学級と特別支援学級の連携に関する考察

—S市におけるアンケート調査の分析を通して—

○岡崎 茜

青山 真二

(北海道教育大学大学院教育学研究科)

(北海道教育大学)

KEY WORD : 「校内連携」「特別支援学級」「通常学級」

1. 目的

2007年、これまでの特殊教育から、知的な遅れのない発達障害を含めて、特別な支援を必要とする幼児児童生徒が在籍するすべての学校において特別支援教育が実施されることとなった(文部科学省,2007)。S市においても特別支援教育の推進として小中学校の通常学級では「校内学びの支援委員会」や学びのサポーター等の活用を含めた校内での組織的な支援体制を整えるなど指導・支援の充実に努めることを掲げている。しかし瀧澤ら(2009)はS市の小中学校の特別支援教育コーディネーター(以下、特別支援教育 Co)の関心は校内体制の整備に向かっている一方で、通常学級に在籍する教育的支援を必要とする児童に対しての支援には課題があると指摘している。本研究ではS市における通常学級と特別支援学級の連携に関して調査研究を行った。このうち両学級の教員同士の連携の現状とニーズに関する質問項目の結果について分析を行い、連携の現状と課題を考察することを目的とする。

2. 方法

S市内の特別支援学級が置かれている小学校154校、中学校79校の計233校の特別支援教育 Co と特別支援学級の教員1名ずつを対象とし、質問紙を郵送で配布・回収を行った。質問紙は小学校用と中学校用に作成し、さらに特別支援教育 Co 用と特別支援学級用を作成した。質問紙の回収率は小学校46%、中学校62%であり、全体の回収率は52%であった。質問項目は小中合わせて106項目であるが、今回はこのうち16項目について考察を行うこととする。

3. 結果

(1) 教員同士助言を求める頻度とニーズ

通常学級の教員が特別支援学級の教員に助言を求める頻度と、助言を求めたいと思うニーズについて Fig.1 に示す。

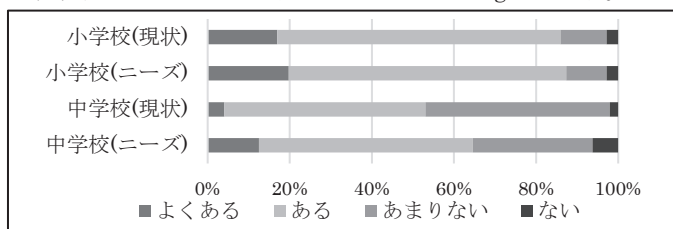


Fig.1 通常学級から特別支援学級に助言を求める頻度とニーズ

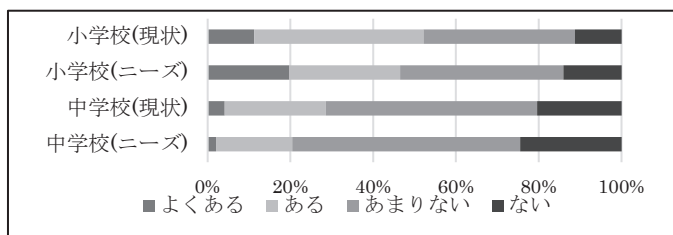


Fig.2 特別支援学級から通常学級に助言を求める頻度とニーズ

通常学級から特別支援学級の教員に助言を求める頻度として、「よくある」「ある」と答えた割合は小学校86%、中学校53%であった。また通常学級の教員が特別支援学級の教員から助言をしてもらいたい割合として「よくある」「ある」の回答は小学校87%、中学校65%であった。(Fig.1)

特別支援学級から通常学級の教員に助言を求める頻度は小学校52%、中学校29%であった。また特別支援学級の教員が通常学級の教員から助言を求めたいと思うニーズとして「よくある」「ある」の回答は小学校47%、中学校20%であった。(Fig.2)

(2) 助言の頻度と各項目の関係性について

アンケートから、通常学級の教員が特別支援学級の教員に求める項目について相関が見られたものを Table 1 に示す。

Table 1

校種	相関がみられる項目	P 値
小学校	児童に関する助言の頻度× 外部の専門機関等に関する助言の頻度	0.70
中学校	保護者との相談場面に関する助言の頻度× 外部の専門機関等に関する助言の頻度	0.53

次に特別支援学級の教員が通常学級の教員に求める項目について相関が見られたものを Table 2 に示す。

Table 2

校種	相関がみられる項目	P 値
小学校	授業に関する助言の頻度× 教材・教具を借りる頻度	0.56
中学校	授業に関する助言の頻度× 教材・教具を借りる頻度	0.48

4. 考察

(1)の結果から、S市の小学校では通常学級から特別支援学級へ助言を求めるニーズや実際に助言を求める頻度が高く共に9割近い割合であり、(2)Table 1の結果から児童に関して助言を求める頻度が高いほど外部の専門機関等に関する助言を求める傾向があることが分かった。ここからS市の小学校における通常学級の多くは、特別支援学級の持つ外部の専門機関等のつながりを活用しながら、児童の指導につなげていることが推察される。一方で特別支援学級から通常学級へ助言を求める頻度とニーズはそれぞれ5割程度に留まっているものの、(2)Table 2から授業に関する頻度が高いと、通常学級から教材・教具を借りる頻度も高いことが分かった。ここから特別支援学級の教科の指導に関して通常学級と連携していることが推察される。

中学校では(1)の結果より、通常学級から特別支援学級へ助言を求める頻度は53%であるが、助言をもらいたい割合が65%と少し上回っている。また(2)Table 1の結果より、保護者との相談場面に特別支援学級の教員が入る頻度が高いほど外部の専門機関についての相談頻度が高い傾向にあることから、通常学級の保護者に対して外部の専門機関や進学についての相談をする際に連携を取っていることが推察される。一方特別支援学級から通常学級に対しては頻度もニーズも2~3割程度である。小学校同様に特別支援学級の教科の指導に関して通常学級と連携していることが推察される。今後は両学級の連携をより推進していくための具体的な提案について考察していくことが課題である。

5. 引用・参考文献

- ・文部科学省(2007) 特別支援教育の推進について(通知)
- ・札幌市教育委員会(2016)「平成28年度札幌市特別支援教育の状況」
- ・瀧澤聡・伊藤かつみ・中島そのみ・仙石泰仁(2009)札幌市立小学校の特別支援教育コーディネーターに対する業務・意識・実態調査 北海道特別支援教育研究第3巻第1号,1-11 (OKAZAKI Akane, AOYAMA Shinji)